

旅行に行く計画をたてていたが、キャンセルをした。ずっと行くことを楽しみにしていた好きなアーティストのライブも延期、中止となった。美味しいものを食べるのが大好きな私は気になるお店があれば、すぐに食べに行っていたが、今はそれまできない。

当たり前だと思って過ごしていた日々の生活が、本当はとてもありがたいものなんだと最近とても感じるようになった。出来なくなったことや、ないものに目を向けるのではなく、自分の周りにあるもの、出来ることに目を向けるようにして、常に何事に対しても感謝の気持ちを持って過ごしていきたいと思う。こんな時だからこそ、この先自分がどう生きていきたいのか真剣に考えていきたい。そして、世界中で起こっている緊急事態が落ちついたら、旅行に行き、ライブではしゃぎ、外食をして好きなことをたくさんしたいと思う。その時まで心身共に、元気でいなくてはと思う。

今年の四月に、富士山麓病院は介護医療院として新たなス

タートについた。私も入職してもうすぐ一年を迎えようとしている。これからも、明るく楽しく真面目に仕事を頑張りたいと思う。当たり前がありがたいことだということを忘れずに。

(事務所職員)

### 新聞読者からのお便り

新聞一六〇号を読んで  
くださった読者からのご感想を紹介します。

#### I 斉藤 明様



○寒い冬がやっと終わりがけた頃から、中国武漢を発端とする新型コロナウイルスの拡がり、急速に勢いを増し、パンデミックやクラスターやオーバーシューターやら、一般人には耳慣れない横文字が次々飛び出して来ています。富士山麓病院スタッフの皆様におかれましても、気の休まらない日々をお過ごしのことと推察申し上げます。

さて、先般は富士山麓病院新聞第一六〇号をお送り下さり、誠に有難うございます。今号の清水院長による巻頭記事「症例検討一〇七」の中で指摘されている「人は目標・計画・期待・希望・夢の実現のために努力と我慢を重ねる。努力と我慢の経験は記憶や知識となつて積み重ねられ、それが明日への生きる力に還元される」という言葉が私の心に強く印象付けられました。そして中野完二氏が書かれている

「太極悠々一四九」の中で、京都妙心寺河野太通管長の「頑張る」という言葉の真の意味は「限られた人生を精一杯生きようと努力すること」であるという発言と響きあうものだと感じました。

山下健氏の「書き初め」は、筆で書く文字(言葉)の意味だけでなく、字の大きさ、太さ、ハネ、トメ、ハライなどに意気を込めることによつて心を表現することなのだということを改めて理解しました。

松下英美氏の「北欧見聞録」を読ませて頂いた時、なぜ我が国では北欧のような福祉が育たな

いのか、という疑問にぶつかりました。その問題を思考しているうちに、日本の「民主主義」が実は未だに借り物だからなのではないのか、という疑問が生じて来ました。松下英美氏からは、大変大きな問題を提起されたような気がしています。

このほかにも素晴らしい記事がいっぱいで、「富士山麓病院新聞」はいつも読み応えがあり、楽しませて頂いています。皆様から感謝しています。

#### II 浦上和子様

高岡さまの文章が印象的でした。「〇〇さんが来られるまでこちらに待っていますよね」という言葉は、Aさんの固着してしまつた現在の時間を、期待できる未来という時間へとつなげるきっかけになられたのでしょうか。

川村さんの「手土産」にも惹かれました。手土産という日本語の持つあたたかな手ざわりも素敵ですね。この言葉が生まれた背景の、何もかも手づくりであった時代が思われました。

太極悠悠・150  
中野完二

「ブー」と言うブザー

年を取って、日頃、うれしいことは滅多にない。けれども、私は、今、東京都に居住している年金受給者で、満七〇歳以上の都民に対する東京都シルバーパスの恩恵に与っていることには大層感謝している。

東京都のシルバーパス事業は、満七〇歳以上の都民の積極的な社会参加を助長するために、東京都からの補助金を受けて、一般社団法人東京バス協会が発行しているものである。

東京都シルバーパスで利用できる交通機関は、都内の路線バス、都電、都営地下鉄、日暮里・舎人ライナーの駅相互間である。都営新宿線は、都外区域については、篠崎駅と本八幡駅の区間でも利用できる。

私は、東京都千代田区神田錦町二丁目五―一〇の、NPO法人日本健康太極拳協会の本部で

の会合や、太極拳の本部道場教室に通ったりするにも、京王バス、小田急バス、都営地下鉄で、日常的に、東京都シルバーパスを利用してもらっている。まことにありがたい。

◎  
ところで、路線バスの乗客がバスから降りるときには、普通バスの車内放送や運転手、車掌さんから、「降車される方（降りる方）は、降車ブザー（降車ボタン）を押してお知らせください」などと告げられるけれども、こんな例がある。

あるとき、私の妻が乗り合わせたバスで見かけたという、年配の女性客が、降りるバス停が近づくのと、ブザーは押さずに、口で「ブー」と言ったらしい。運転手さんもその「ブー」に気づかずについて、バス停には止まらなかった。年配の女性客

は、なおも「ブー」と言っていたので、ほかのお客さまが気がついて、運転手さんに知らせた。バスを止めることができたという。

その年配の女性客は、口で「ブー」と言えば、「降りますよ」と同じ意味で通ずる、と信じこんでいたのかもしれない。

◎  
そのバスは、深大寺の近くから吉祥寺駅行きのバスだったらしいが、私は「ブー」でバスを止める方には出会ったことがない。

バス会社も、今時、口で「ブー」と言つて、バスを止めようとすると、人があるとは思っていないであろうが、（多くはないだろうけれども）いらつしやる、というところが、おもしろいし、恐ろしい、と思った。

◎  
常識は、だれにでも、どこでも、広く通用するとは限らない。相手により、その場の状況により、最善の結論や行動をとるようにならなければならない。中国の『論語』などの古典の知

恵などにも普段から学んでおかなければならない。

◎  
唐の劉希夷（字は廷芝）という詩人の詩に「白頭を悲しむ翁に代わる」という作品がある。

年年歳歳花相似

（年年歳歳花相似たり）

歳歳年年人不同

（歳歳年年人同じからず）

毎年毎年、咲く花は同じように美しいが、それを眺める人間の姿は同じではなく、年ごとに衰えて行くよ、という詩で、自然と人間を対比させ、人生の無常を感じさせる。

作者劉希夷は、詩人・宋之問のお婿さんにあたるが、掲出の二句に感心した宋之問に、自分にゆづつてくれと請われたのに承知しなかったために、殺されたという伝説があるらしい。

「ブー」でバスを止めた話と劉希夷の詩とは、質が違ふけれども、同じことを伝える言葉、行動、タイミングなどをいろいろ考えさせられた。

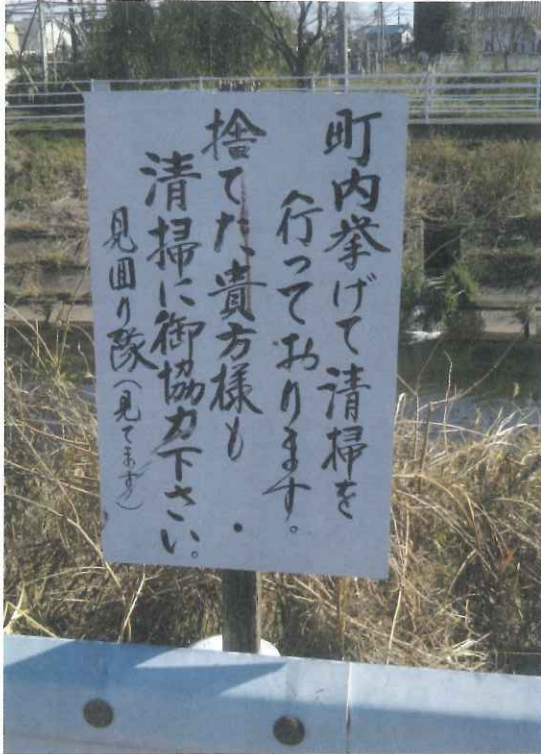


## 藪脱みカメラ世相④⑦ 内藤真治

### 「見られています」

新型コロナウイルス騒ぎで引きこもり状態になってしまった。当方、基礎疾患持ちの高齢者。その上、教養と教育といえは、「今日用がある」と「今日行くところがある」だが、内容は不要不急のものばかり（今日用と

今日行くは某女子大の学長先生考案の「現代用語」らしいが、うまいこと言うものです。そこで運動不足解消のために近くをせっせと散歩中に見つけたのがこの掲示、なかなか見事な字で書いてある。



フムフム、えらいですねえ。三、四行目は皮肉もきいている。ところが、

最後の一行で「アレ」と思い、カッコ内の（見えます）で少し怖くなった。

\*

今、《事件》が起こるとすぐに「防犯カメラ」が登場する。車で逃げればNシステムだ。Nはナンバーの頭文字、高速道路のあちこちに設置されたカメラが、車のナンバープレートとともに運転者の顔をバッチリと写しとっている。

防犯カメラやNシステムの存在が犯人の早期逮捕につながっていることは確かで、だから市民の安全・安心のためにはカメラの数は多いほどいいと考える人もいる。

防犯カメラと言っているけれど一面では「監視カメラ」である。これだけ《個人情報保護》や《プライバシーの権利》が言われる時代でも、お上はいともたやすく個人が「いつ、どこでなにをしていたか」を簡単に割

り出せる時代なのである。

\*

町内の「見回り隊」による（見えます）が怖いのは、お上による「監視」でなく、権力とは無縁な庶民による「相互監視」につながりかねない点だ。

江戸時代の五人組制度は、数の少ない武士が圧倒的多数の農民を支配するために、隣近所の助け合い（相互扶助）と抱き合わせで隠れキリシタンや犯罪の摘発に《連帯責任制》を持ち込んだ点に特徴がある。

相互監視と密告奨励が「壁に耳あり障子に目あり」「人を見たら泥棒と思え」などの悲しいことわざを生んだ。少数者が多数を支配する極意は、「多数を分断すること」に尽きるのだから。

戦前戦中の隣組制度にもその《伝統》は受け継がれ、政府や軍に批判的な言動は隣近所の「告げ口」で検挙された。

「たかが町内の美化運動」からあれこれ考えてしまった。

# 生き物は生きています 6 栃本忠良

## 可愛い動物 鳩

鳩が池で水浴びをすると、水面に白い粉が一面に浮かぶ。鳥が嘴で尾羽の付け根辺りから全身に向かって撫でつけている姿をよく見かける。尾の付け根の背中側に尾脂腺という分泌腺があり、そこから出る油脂を全身の羽に塗って、防水をしている。ところが、鳩では、尾脂腺が発達せず、そのかわりに粉綿羽という羽があり、生える時とすぐ崩れて脂粉という粉になって水をはじく。先日、散策に出かけたら、二羽の鳩が流れる川の中に座り込んで水浴びをしていた。

◇ 私たちの近くににいる鳩の仲間には、カワラバト（河原鳩）とキジバト（雉鳩）である。

河原鳩は神社などに多い鳩で、土鳩とも呼ばれている。基本的には、青と黒と灰色が入り混じった色をしているが、人に飼われ、多種多様な模様になった。

鎌倉の鶴岡八幡宮には、源氏の色である白鳩がほとんどである。

雉鳩は、山鳩とも呼ばれ、本来、里山に住み、時には人の口にも入っていた。茶色と黒の組み合わせで、人の手が入っていないので、皆同じ模様である。

近年、大磯の照ヶ崎海岸に海水を飲みに来るアオバト（緑鳩）が注目されるようになった。内陸では、温泉水を飲みを集まることも知られている。おそろくミネラル補給であろうが、緑鳩の生態については判っていないことも多い。

◇ 日本では埼玉県の越谷付近に見られるシラコバト（白子鳩）は、国の天然記念物に指定され、絶滅が心配されている。首に黒い模様のある、青みがかった灰色の小型の鳩である。

熱帯に住むオウギバト（扇鳩）は、最も大きく、七面鳥ほどもあり、鳩とは思えない。太鼓を

叩くような声を出す。扇状の冠が美しい。

◇ 鳩は、我々日本人にとって、雀と共に最も身近な野鳥である。（芭蕉忌や鳩も雀も客の数

小林一茶）

鶏は隣に来た仲間を必ずつつく。つつきの順位制といって、上下関係をつくって群れの安定化を図る。鴉も仲間意識が強く、よそ者に対して猛烈な攻撃を仕掛ける。そこにいくと、鳩が喧嘩をしているのをあまり見かけない。その為か鳩が平和のシンボルとして、イベントなどで放たれる光景はよく目にする。

◇ 鳩は帰巢性が強い。自分の棲み家をよく覚えていて、海越え、山越え、野越えというとんでもない遠距離を、太陽や星の位置で計測するらしく、方向を間違えずに帰ってくる。この能力を利用したものが、伝書鳩である。遠方から帰ってきた姿を見れば、可愛さが一層増すだろう。

（初便り少年友へ鳩放つ

和田祥子）



アオバト



オウギバト

ただ、近づきすぎて問題になることも出てくる。庭木ならまだしも、テラスやベランダなどに巣を掛けることがある。出がけに爆弾を命中されれば、運がついたでは済まされない。鳩の糞に特有のクリプトコックス症、脳症で命に関わった人もある。

いくら可愛くとも、野生とはやはり一線を画すことも必要かも知れない。



## 音楽の効用

新型コロナウイルスの感染拡大で、非常事態宣言が発令され、外出自粛となったため、いろいろな集まり、会議などがみな中止となった。

仕方なく、家に居てパソコン作業に専念している。ときおりラジオでコロナ情報を聞く以外は、CDで音楽を聴きながらということが多い。聴くものの主なものは、いろいろだが、もつとも作業にうつてつけないのは、バロックのものが多い。過度な情緒はなく、適度な気持ちのゆらぎを与えてくれる。バッハのブランデンブルグ協奏曲などは殆ど毎日聴いていることになる。

考えてみると、何百年も前の人の抱いた音楽のイメージが、今現在我々に対して大きな影響を与えてくれるという事は、素晴らしい不思議としか言いようがない。しかも、

音楽の効用については、古代ギリシャの哲学者アリストテレスも「情緒のカタルシスに音楽が有効である」と説いており、また、古代エジプト人は音楽を「魂の薬」とよんでいたという。音楽はストレスを解消し、免疫力を高めるなどとも言われている。

こうした、実用とは関係なく、何かしながら音楽を聴く、あるいは音楽を聴きながら何かをするという事で、魂の薬の働きをしてきているかもしれないと思うと、ますます音楽に感謝しなくてはならない。

◎ そういえば、最初に音楽に夢中になっていった中学生の頃に、家にピアノがないのに、どうしても習いたいと思い、近所のピアノ教室に行かせてもらい、練習は夜先生のところで

弾かせてもらっていた。家では紙鍵盤で練習するというようなことを二年くらいは続いたと思う。残念ながら、受験戦争に飲み込まれ、中学三年で中断してしまった。

その後、音楽熱は大学に入ってから合唱団に入ることに繋がった。更には、後年、娘二人がピアノや声楽を習うようになったことにも繋がっていったような気がしている。

◎ 合唱団では指揮をすることになったが、このことが今では俳句の会での編集に、また、この施設での新聞編集にも役立つような気がしている。いろいろな人の気持ちの籠った文章を取り集めて一つのまとまったものに仕上げていくことに、合唱指揮の体験が大変役立つことを思うと、音楽との不思議な縁を改めて感じている。ものを作らあげていく上で、人と人との繋がりを大切に、一人一人の気持ちを組み合わせたいというハーモニーを作りたいと思っている。

## 編集後記

新型コロナウイルスの感染拡大のため、緊急事態宣言が発令され、いつ収束するのか見通しのつかない状態だが、少しずつ元に戻ってほしいと思う。

今回、新聞の読者の方々から貴重なご感想を頂いたものを掲載させていただいた。今後これらのの方々のご意見を参考に誌面を充実させていきたいと思う。当施設の名称が変更になって初めての号であるが、今後も内外の情報に気を配っていききたい。今回、介護福祉士の殿内三奈子さん、清掃の仕事の青木光子さん、事務職の勝又伽耶さんたちの、利用者の方々との心あたたまるやりとりなどに感動させられた。

四月に発令された緊急事態宣言が延長されてしまったが、五月に入った新緑のなか、みなさま方のご健康を祈りつつ、遅くなった新聞一六一号をお届けいたします。

(川村研治)